

第1回次期水源地域交流の里づくり計画検討委員会開催結果について

1 会議名

第1回次期水源地域交流の里づくり計画検討委員会

2 開催方法

書面開催

3 開催期間

令和2年5月15日(金)～令和2年5月29日(金)の15日間

4 議題及び報告事項

(1) 議題

議題1(議決事項) 委員長の選出について

議題2(議決事項) 議事録の作成及び委員会の公開について

議題3(意見聴取) 次期水源地域交流の里づくり計画の方向性に係る意見について

(2) 報告

報告1 現行計画における取組の検証について

5 出席者

宮林 茂幸、鷲尾 裕子、中里 正巳、米田 博行、石田 貴久、岩澤 克美、
宮崎 仁男、石井 千春、新井 武雄、稲葉 展史、齋藤 伸介、折田 克也

6 開催結果

(1) 議題1 委員長の選出について

賛成一致により、宮林 茂幸委員を委員長とする。

(2) 議題2 議事録の作成及び委員会の公開について

賛成一致により、本委員会における議事録の作成方法並びに委員会の公開の可否及びその方法について、次のとおりとする。

1 議事録の作成方法

(1) 書面開催

各委員の意見の趣旨を変えない範囲で、回答書の要約を行い、作成する。

(2) 会議開催

協議の流れが分かる範囲で、各委員の発言内容の要約を行い、作成する。

2 委員会の公開

(1) 公開の可否

本委員会での会議内容は、原則公開とする。

(2) 公開の方法

ア 書面開催

議事録を神奈川県ホームページ上に公開する。

イ 会議開催

「次期水源地域交流の里づくり計画検討委員会傍聴要領」のとおり会議を公開し、併せて議事録を神奈川県ホームページ上に公開する。

(3) 議題3 次期水源地域交流の里づくり計画の方向性について

各委員からの意見は別紙のとおり。

7 次回開催

令和2年9月予定

「議題3 次期水源地域交流の里づくり計画の方向性」に係る意見について

1 次期計画の策定に関わる部分について

宮林委員長	<p>① 「交流の里づくり」という名称について、交流だけでは「どこ」の場所か見え難い。 → 「丹沢交流の里」や「たんざわ…里」という様にしてはどうか。</p> <p>② 水源地を守ることは、県民の健康、教育、防災などに貢献するというように「何のために」という基本項目を明確にすること。水源地のランドデザインをわかりやすく、県民にとって何かを明確にする。</p> <p>③ 上流域の住民は具体的に「何を」「どうしてほしい」など、具体的な要望は何なのか分からない。課題は見えているが、要望が見えていない。</p> <p>④ 下流域や県民にとって、水源地域は具体的に「何を」「だれが」「いつ」「どのように」体験できるのか、活動の中身を示すこと。</p>
石田委員	<p>「神奈川県が水の恩恵を受ける都市地域住民に対する理解促進という役割を今後も担っていく必要がある。」というのは、本当にそのように思う。引き続きよろしく願いたい。</p>
米田委員	<p>① 「現行計画4年間の取組で一定の成果をあげている」という記述に関して、一定の成果をどのように分析したのか明確に示してほしい。</p> <p>② 「継続して活性化事業や水源地域の理解促進事業に取り組むべきである」という意見が強く」という記述に関して、「成果」及び「継続」の組織的な分析の具体例を示していただくと分かりやすい。</p>
岩澤委員	<p>異議なし。</p>
宮崎委員	<p>① 「次期計画は県が主体的に取組を継続するんだ」というより、「地元市町村や地域からの強い意見によって策定する」が前面に出ているような気がする。</p>
折田委員	<p>資料の「1 次期計画の策定」にあるとおり、新たな計画を策定し、取組を継続することが必要と考える。</p>

2 現行計画における主な課題に関わる部分について

宮林委員長	<p>① エリア自治体のこの事業に対する関わりと役割及び、機能を明確にし、広域連携ないしは広域による産官学連携を進めてはどうか。</p> <p>② 資料の「別紙 次期計画の施策・事業体系図(たたき台)」の大柱の部分で、「水源地域の活性化」、「水源環境の理解促進」に加えて、県民の安心・安全な暮らし、健康づくり、人間づくりの促進を入れてはどうか。特に、健康や人材育成(E S D・学校教育・幼児教育などの体験学習)がこれから益々必要となるから。</p> <p>③ 交流連携を促進することで何が可能となるか。その部分がユーザーにとって一番関心があるのではないか。</p> <p>④ 3つのエリアにおける小柱は、それぞれのエリアにおける具体的な交流の中身と、それが県民や下流域住民にとってどういう意味があるかを具体的に入れること。</p>
鷺尾委員	<p>「やまなみ五湖」という名称は、響きも良く、山の緑とダム湖の青が思い浮かぶ。ただ、残念ながら、神奈川県にあることが分からないので、県内の方にも県外の方にも、その場所(位置)が分かる名前があると良い。</p> <p>また、SDG sの視点からも自分たちの暮らしに欠かせない水、水源を県民に親しんでもらう取組は重要である。</p>
中里委員	<p>① 「水源地域の活性化」について、相模湖周辺は、人口の減少と高齢化が急速に進んでいる地域であって、しかも、平日は都内への通勤者も多く、昼間の人口が減少する中、地域の活性化策については地元自治体等でも難しい問題となっている。</p> <p>② 「交流の里」というイメージは、場所ではなくその地域全体を表す言葉として思われている様子で、交流の場としての名称に結びついてないのではないか。</p>
石田委員	<p>「水源地域の活性化」は、事業の目的としては漠然とした表現であるため、どの状態になれば達成されたのかがわかりにくいところに問題があると思う。</p> <p>事業の性質や数量目標に定めることができないのであれば「水源地域の活性化」という漠然としたものを目的に掲げるのはどうかと考える。</p> <p>「水源環境の理解促進」は、アンケート等で成果を計ることができるので、これに特化しても良いのではないか。</p>
米田委員	<p>① 「やまなみ五湖」、「交流の里」の認知度について 認知度を指摘している「現行計画の検証の一環で実施しているフォローアップ会議」とは、計画の実施体制のどこに位置付けられているのかが読み取れない。</p> <p>② 計画で使用される「交流・活性化・理解の促進」の用語に関して、次のように読み取れる。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">交流 : 交流の里という施設での水源地域と都市地域住民の交流</p>

	<p>活性化 : 水源地域の来訪を促す 理解の促進 : 水源環境の現状の積極的な発信により理解を深める</p> <p>③ 「計画が想定する主体の変化」について 計画の都度、分析を実施することにより、その変化は見えてくるものであり、常に変化を感じ取れる体制が必要だと思う。</p> <p>④ 「交流・活性化・理解の促進」について 計画の継続性から流入人口・地域の認知度の変化を見ることにより、ある程度分析ができるかもしれない。その分析から計画の意図との違いを抽出することにより、より地域に密着した計画の立案ができるのではないか。</p>
岩澤委員	<p>① 「やまなみ五湖」の認知度が低いことが課題であり、県内、関係する私たち地域の住民でも「やまなみ五湖」と言われても知らない人が大半であることを考えると、公募で新しいネーミングを考えてもいいのではないか。</p> <p>② 地域でくくるのではなく、神奈川県全体の水がめとして認識してもらうこと。</p> <p>③ 里の案内人では、コーディネーターにはなりきれないので、相模湖観光協会のような中間コーディネーターが企画・立案し、現場は里の案内人等が担う体制を組織化して、全体を俯瞰してみてもらえる専門家が必要だと思う。</p>
宮崎委員	<p>① 水源地域の活性化の為に県が策定した計画であるが、水源地域の住民の意識が薄らいできているのも事実である。</p> <p>② 名称の認知度等も課題ではあるが、計画を継続でき、地域住民を巻き込む実施体制を整えるのも大きな課題と考える。</p>
石井委員	<p>資料の「2(2)エ 計画の実施体制の変化」の「また、～」以降に記載されている内容について、具体的なイメージが分かりにくいいため、具体性のある記述が望まれる(実行委員会形式の見直しを行った結果、県と市町村等とが連携・協力して事業を進める中で具体的にどんな乖離が生じているのか)。</p>
稲葉委員	<p>主体の変化について 水源地域住民の水源地域への理解と水源地域に関する意識が薄れつつあると判断した要因とは何か。</p>
折田委員	<p>資料の「2(2)イ 計画の主題の変化」に記載があるとおおり、清川村では担い手不足が課題と考えており、主題が施策の継続性に移行していると考ええる。</p>

3 策定に向けた方向性に関わる部分について

宮林委員長	<p>① ユーザーに分かりやすくする。(例)「たんざわ交流の里」</p> <p>② 交流の中身を明確にする。例えば、水源林ボランティア、体験農村学、たんざわの文化体験、健康増進体験、環境教育の推進など。</p> <p>③ たんざわの自然や文化、芸能等が県民のくらしや防災にとって、どのような関わりがあり、必要なのかを示す。だから、県民一体で守るという考え方につながる。</p> <p>④ 「新たな地域づくり」、「ニューノーマル」(新しい生活様式)という視点を取り入れると、この計画の役割が出てくるのでは。企業活動や県民のセキュリティの場として。</p>
鷺尾委員	<p>① エリアごとの実情に応じた取組という考え方は支持したいと思う。そのためには、エリアの現在と進みたい姿を、エリア内外からきちんと聞き取り等実施し、明確にしてもらいたい。エリアの組合せによって、より魅力的な観光ルートもできると思う。</p> <p>② 「交流の里」と「里の案内人」は具体的なイメージがしにくいので、やまなみ五湖、その地域ごとの特徴ある場所、エリア、人を前面に押し出してほしい。</p>
中里委員	<p>① 「やまなみ五湖」が神奈川県どこに位置し、湖の名称を全部知っている人はごく少数に限られるのではないかと思う。例えば「神奈川の水源・やまなみ五湖」とすれば多少位置関係はわかってくるのかなと思われる。</p> <p>② 「水源環境の理解促進」の取組として、水源地域住民と都市地域住民の「連携・協働」により、水源地域づくりを行うということであるが、水源地域の交流の強化以外で、具体的にどのような内容になるのか。</p>
石田委員	<p>繰り返しになるが、「活性化」とは何か。「活性化」を目的にすることは、現状が活性化していないことを認めることになってしまうが、実際にはそんなことはないと思う。</p> <p>この言葉を使うほど、陳腐で実意のないものになってしまうと感じる。</p>
米田委員	<p>目的と主体に関して</p> <p>次期計画の目的は、「活力のある水源地域づくりを進めていくため、『水源地域の活性化』及び『水源環境の理解促進』の2つを目的とする」とある。</p> <p>しかし、資料の「3 策定に向けた方向性」全体の流れからは、次のとおり理解できる。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>目的： 「活力のある水源地域づくり」</p> <p>→ 水源地域の多彩な魅力を高め、それらの魅力を発信し、水源地域の活性化を推進する。</p> <p>主体： 県民全体を主体として、「活用のある水源地域づくり」に取り組むために、水源地域の理解促進が必要である。</p> <p>そのため、水源地域へより多くの人に来てもらうことにより、目標</p> </div>

	<p>を達成する。</p> <p>したがって、この計画の取組の効果は、「水源地域の交流人口(来訪者数)」により把握できることになる。</p>
岩澤委員	<p>① 水源環境の理解促進について、是非水源地域住民の巻き込みが必要だと感じる。</p> <p>清川村民でも、近年、移住してきた人たちは、宮ヶ瀬湖によく遊びにきて、清川村をよく理解したうえで、住民になっているので、良さを十分理解している。一方で、何十年も前に移住してきた人たち、若しくは、生まれ育った住民は、水源環境について理解はしているが、それほど湖に興味がない、若しくは魅力を感じていない、と感じる。</p> <p>神奈川県の水がめとして県民全体の理解促進を図るために、下流域に対してのイベントが多かったが、今後は上流域の住民を巻き込んだ(中心とした)イベントをすることもいいのではないか。</p> <p>東京マラソンのように、イベント運営ボランティアは下流域の住民を担い手とし、主体的に取り組んでもらいながら、地域住民と一緒に交流を深めるようなイベントが開催できたら理想的と考える。</p> <p>② エリア設定の見直しに関しては、再検討をお願いしたい。</p>
宮崎委員	<p>① 方向性は理解する。</p> <p>② エリア設定の見直しで、それぞれの地域の特色を発信できる。</p>
石井委員	<p>① 資料の「3(1) 名称(「やまなみ五湖」)について」は、これのみでは自分たちの地域や生活との関連性を想起しにくいと、わかりやすいネーミングや親近感・興味を持ちやすくする工夫なども必要と考える。</p> <p>② 資料の「3(2)イ(イ) 2つの目的の関係とその主体の整理」における「このため、～両者が「連・協働」により～」の部分については、イメージ図と整合していないと思われる。</p> <p>文中では、交流が不十分であるという基本認識のもと、「交流をより一層強化するため」として、「水源地域と都市地域のすべての県民が「連携・協働」して水源地域づくりを行えるようにする」としているが、イメージ図では交流の一層の強化に関する記載がされていないため、本文とイメージ図の関連性が不明確と思われる。</p> <p>③ 資料の「3(3) 対象地域について」における「ア エリア設定の見直し」の中で、相模原エリアという名称が付されていることについては、「やまなみ五湖」という名称と同様、具体的な湖のイメージを持ちにくいことが危惧される。また、宮ヶ瀬湖は相模原市にも属しているが、「相模原エリア」と「宮ヶ瀬エリア」という設定になると、相模原市と宮ヶ瀬湖の関係性がわかりにくくなってしまうことも懸念される。</p>
新井委員	<p>① 資料記載のとおり、水源地域住民においても水源環境への理解や意識そのものが薄れてきているように感じられる。県民全体が神奈川の水を守るため</p>

	<p>に水源地域の方々が多く犠牲を払っていることを知らない方が大部分であると思う。改めて、より多くの方々に知ってもらうためには、イベントなどでの一過性の交流だけでは浸透しきれないと思う。</p> <p>② エリアの再整理については、相模原・宮ヶ瀬エリアと山北エリアでは、地理的な距離や住民意識などに違いがあることから、2階建構造で考えていくことは好ましいと思う。</p>
<p>稲葉委員</p>	<p>実施主体の整理について</p> <p>自然体験交流教室事業と上下流域自治体間交流事業について、地域と町が主体となって企画の段階から事業を運営しているが、高齢化によって、地域の負担が大きくなり、事業の継続性が難しくなるため、県の直接執行に変わったことも踏まえて、企画の段階から県が運営に携わってもらいたい。</p>
<p>折田委員</p>	<p>「2 現行計画における主な課題に関わる部分について」での意見のとおり、清川村では担い手が不足している中、資料3(2)イ(イ)の主体を水源地域住民と都市地域住民の両者を合わせた県民全体とすることは、担い手の確保や施策の継続性の面で大いに期待できると考える。</p> <p>また、資料の「3(2)イ 現行計画からの見直し」の取組については、2階建構造として、エリアの特色に合わせて、柔軟に実施していくことが望ましいと考える。</p>

4 具体的な施策及び構成事業に関わる部分について

宮林委員長	<p>① 水源地域自治体と県、あるいは関係団体等における協議会方式の他に、上流域と下流域とで流域を結ぶ中間セクターが欲しい。</p> <p>② 上流域エリア内に、全体計画を推進するプラットフォームのDMO的な議論の場が欲しい。</p> <p>③ 企業を積極的に組み入れる仕組み、企業の森、企業の里、企業のふるさとのような協定システムが考えられるとよい。</p> <p>④ 新規参入者等を受け入れる仕組みとしての定住推進組織(県自治体による)や、一体的情報システムと受け皿づくりの仕組みが必要。</p> <p>⑤ 具体的には、「たんざわナビ」や「たんざわネットワーク」のような情報ネットがほしい。</p>
鷺尾委員	<p>「3 策定に向けた方向性に関わる部分について」での意見とも関わるが、各エリアの特徴はもう少し丁寧につかんでもらいたい。端緒と捉えられる特徴をどう生かしていくかも大切である。</p>
中里委員	<p>エリアの特色に合わせて実施する事業で、交流の里(施設)を増やしていくことは検討できるものなのか。</p>
石田委員	<p>AirbnbやTABICAといったイベント情報サイトに掲載する際に発生する手数料(参加費の2~10%程度)の一部又は全部を補助するのをやってみてはどうか。</p> <p>やまなみ五湖のエリアには、いろんな体験を提供できる人がいるはずだが、集客力がないのが課題だと思う。</p> <p>※ Airbnb : 宿泊施設・民宿を貸し出す人向けのウェブサイト。世界192カ国の33,000の都市で80万以上の宿を提供している。</p> <p>※ TABICA : 体験を企画・開催する「ホスト」と参加する側である「ゲスト」を繋げるサービス。全国に住むホストが企画する体験に参加することができるため、地元の人同士の交流だけではなく、旅先地の地元の人との交流にも使うことができる。</p>
米田委員	<p>水源地域の魅力を発信できる人材の発掘・確保(「里の案内人」活動の充実の終了に関して)</p> <ul style="list-style-type: none"> 水源地域の魅力を発信できる人材の発掘・確保については次のとおりである。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>発信できる人材： 水源地域(地元)の人間は、当たり前前環境であるため、発信すべき魅力に気付かない。</p> <p>発信すべき魅力に気付く人材は、地元以外の人ではないか。</p> <p>水源地域の魅力： 魅力については、環境、人材に着目すると、</p> </div>

	<p style="text-align: center;">環境→ 豊かな自然 人材→ 水源地域環境で暮らす知恵の持ち主「里の案内人」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 水源地域の魅力発信ができる人材(NPO、企業含む)の発掘、活動を支援する必要がある。 ・ 地域の人にとっては日常のことでも、地域以外の人にとっては魅力的に感じる人が多い。 環境は、地域以外の人自身の行動で魅力を感じ取ってもらえる。 しかし、人材については、個人の行動に依存するより地元で掘り起こし、接する機会を設ける方が魅力を感じとってもらいやすい。水源地域(環境)に暮らす知恵の持ち主である現状の「里の案内人」が、水源地域の魅力を感じ取ってもらえるベース(基礎)に位置付けられると思う。 したがって、「里の案内人」の定義を見直し、事業の終了ではなく「里の案内人」の更なる掘り起こし、人材のベース(基礎)の拡大が必要ではないかと考える。
岩澤委員	<p>水源地域の魅力の一番は「人」だと思う。そこに根付いた、そこでしか体験できないものは、人を介してしか魅力は伝えられない。その「人」に会いに行く、その「人」の魅力発信を積極的に行ってほしい。現実、県(協議会)のHPを見て清川村に移住してきた人もおり、メディアの発信の力はすごいと思う。</p>
宮崎委員	<ol style="list-style-type: none"> ① 新たに加える施策「<新>水源地域の魅力を発信できる人材の発掘・確保」には同感である。 ② 水源地域で活動している団体は意外と多い。「水」とは直接関わりはなくても支援は必要と考える。 ③ エリアの特色は積極的に発信すべき。
石井委員	<ol style="list-style-type: none"> ① 資料の「4(1)ア(イ) 施策体系(たたき台)」における「特産品への支援」については、支援の考え方が記載されていないため、金銭的な補助やPRの強化など、具体的な支援の考え方を示すか、それが難しければ「やまなみグッズ」のPRに特化した形でわかりやすく記載した方がよい。 ② 資料の「4(1)イ(イ) エリア設定」については、「相模原エリア」と「宮ヶ瀬エリア」が資料の「3(3)ア エリア設定の見直し」に記載のとおり、自治体と所在が分かりにくいことから、例えば「津久井湖・相模湖エリア」、「宮ヶ瀬湖エリア」、「丹沢湖エリア」など、認知度の高い「湖の名称」を前面に出したエリア設定を検討することが望ましいと考える。
新井委員	<ol style="list-style-type: none"> ① 現行計画の3つの施策に加えて新たな施策を検討することは、課題でも挙げられている「県民に対する認知度の低さ」などの解決につながるものと考ええる。 ② 都市地域住民との交流の場のひとつである既存の地域資源に「来て・見て・知って」もらうためにブラッシュアップしていく必要があるのではない

	<p>かと思う。それにより水源環境への理解が深まるものと考えられる。なお、地域資源として、県民の森や市民の森、企業の森などを県と市町村、民間や他の部局が所管する施設などと横断的に活用することも必要ではないかと思う。</p>
稲葉委員	<p>森林手入れボランティアについて</p> <p>森林内でボランティア活動を行う場合、事業実施場所までバスや徒歩で行けることや、近隣にトイレが設置されていることなどが必要となると考えられるが、当町の森林は傾斜地が多いため、適地の確保が難しい。そのため他の支援策を検討した方が効果的ではないか。</p>
折田委員	<p>エリア設定については3エリアとすることに意見はなく、(仮称)宮ヶ瀬エリアについては、DMOによる取組が進められているので、この取組に連携していければ良いと考える。</p>

5 その他

宮林委員長	<p>① やはり上流域が主体となった「やる気」のある態勢が重要である。すなわち、上流域における主体的で、積極的な取り組みが最も重要といえる。</p> <p>② 県民には上流からのアプローチも良いが、県民の立場(ユーザーの立場)に立った中身のPRが必要と思われる。</p> <p>③ 上流と下流(県民)とを結ぶ、コーディネーター組織が必要。 体験事業や特産品の開発と流通、たんざわ交流の里、産学のイメージなど。</p> <p>④ 新型コロナウイルスの感染拡大で、農山村や緑の役割がSDGsやSDKs (Social distance keepings)との関わりで新たな関心と役割や機能が生まれ、新たな生活様式におけるあり方を議論する時代に来ている。</p>
鷺尾委員	<p>本委員会の良さは、地域の方(行政も市民も)が関わっていることである。時間がかかるかと思うが、今回のような形式の会はとてもいいと思う。</p>
米田委員	<p>① 目的、その目的を達成するための施策、及び達成すべき成果を明確にする必要がある。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>目的 : 活力のある水源地域づくり</p> <p>目的達成するための施策 : 水源地域の活性化 → 積極的な活動 水源地域の理解促進 → 地道であるが継続的な活動</p> <p>達成すべき成果 : 「水源地域の交流人口(来訪者)」の増加</p> </div> <p>② 次期計画の施策・事業体系図について 大柱の「水源地域の活性化・水源地域の理解促進」を分けることにより、中柱、小柱で示す実施事業との関係が明確になるのではないかと。</p>
宮崎委員	<p>「水源地域の活性化」の取組と「観光の取組」は切り離しては考えられない。計画はそれぞれだが、整理は必要と考える。</p>
石井委員	<p>資料の「別紙 次期計画の施策・事業体系図(たたき台)」との関連性が分かりにくいため、新旧対照表などによる提示が望ましい。</p> <p>※ 津久井湖の北側の山頂に位置する「城山湖」は、津久井湖の水を活用した揚水式のダム湖であり、秀逸な眺望と併せ、周辺の散策施設や北側の谷戸に広がる里山など、津久井湖と一体となって豊かな観光資源の魅力を創出していることから、パンフレットへの掲載(図、記事など)にご配慮をお願いしたい。</p>
新井委員	<p>水源地域の資源は、県全体の貴重な財産であり、それを守っていくことは県民全体の責務であることをもっと都市地域住民に知ってもらうことが、本計画の役割であり、SDGsの概念につながるものと思う。</p>
折田委員	<p>全体的な考え方、方向性については、異議はなし。</p>